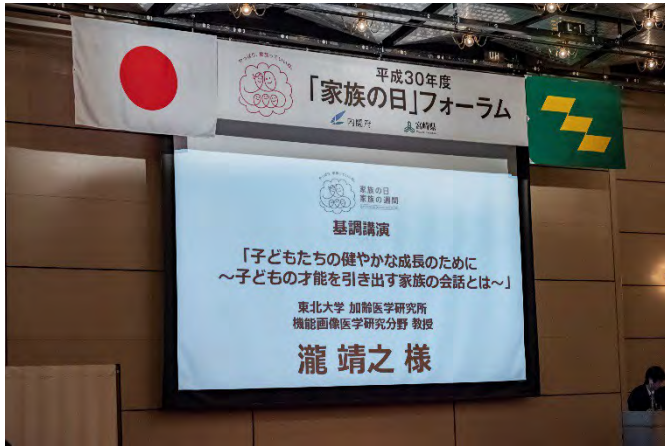


基調講演 「子どもたちの健やかな成長のために～子どもの才能を引き出す家族の会話とは～」 13:25～14:30

東北大学 加齢医学研究所 機能画像医学研究分野 瀧靖之教授をお招きし、「子どもたちの健やかな成長のために～子どもの才能を引き出す家族の会話とは～」というタイトルでご講演いただきました。



「東北大学で、脳の発達、加齢に関わる研究をしています。子どもたちの脳というのは非常にダイナミックに発達をします。生まれて全ての脳の領域が一遍に発達をするわけではありません。脳は後ろの原始的なところから発達のピークを迎えて、思春期ぐらいで前頭葉の前、前頭前野にピークが来ます。赤ちゃんは感覚に関わる脳の領域、見たり聞いたりぬくもりを感じたりに発達のピークが来ます。この頃は愛着形成が大事。笑顔で赤ちゃんの目を見て、ぎゅっと抱きしめながらたくさん話し掛けてあげましょう。生後半年から1歳ぐらいは母国語の獲得時期が来ます。どのような本でも絵本でもいいので、とにかくたくさん本を読み聞かせて上げるのが大事です。

もう少し大きくなってくると、自分と外の世界の区別がついてきます。外の世界に対して興味が出てくるのです。図鑑のようなもので何かに興味を持ちます。非常に伸びたご家庭というのは、すかさず本物を見せに連れていきます。本に出ているのは世の中に存在している、広がりを見せてあげるこの知的好奇心を伸ばすことが、その後の勉強や仕事、人生につながります。

3歳から5歳ぐらいは運動能力の獲得に適した時期です。プロの演奏家やオリンピック選手は、このぐらいから少しずつ始められている方が多く、8歳から10歳ぐらいまでが第2言語の臨界期、英語獲得にいい時期。リスニングをやると、いわゆる耳が良くなるといわれています。小学校、中学校は前頭前野のピークが来ます。大切なのは、SNSでメッセージを打っているのではなくて、フェイスツーフェイスの実際にリアルなコミュニケーションです。親子、友達同士などのコミュニケーションがとても大事。

子どもたちが夢をかなえるにはどうしたらいいのかというのが私たちのとても大きな研究のテーマでした。一番良いのは親が実践することなのです。うまくても下手でもいい。親がやって、それを子どもに見せてあげるといことです。私も生まれてこのかた水泳経験がありませんが、今息子と一緒に必死になって泳いでいます。子どもに何かをさせようと思ったら、私たち親、あるいは大人は、一緒に努力をして頑張ること、これこそが究極の教育だということがいわれています。

息子は20歳、自分はもう30歳だから手遅れと思われる方、脳には変化をする力、可塑性があります。いつから何を始めても、確実に能力は伸びるのです。30歳からピアノ、50歳、80歳から英会話など、努力にかかる時間は増えますが、全て能力は伸びていきます。

成績が伸びるご家庭の共通点は多いです。一番は熱中体験。何かを極めたいと思うと自分で一生懸命頑張ろうとします。でも、壁が来ます。先生や親や友達などに聞き、本も日本語の本だけではなく英語の本で調べるなど、トライアンドエラーをします。勉強や仕事と全く同じです。もう一つ重要なのは生活習慣です。睡眠時間を削ると海馬の体積が萎縮傾向になります。記憶などに影響を与えてしまうのです。子どもたちは8時間、9時間しっかり睡眠を。食べることも大事。食べないよりは何倍も食べるほうがいいのです。体を動かすのも大事。たくさん走って、たくさん遊ぶべきなのです。

褒めると脳の発達が促進されます。努力の過程を褒めるのが子どもたちの能力を伸ばす上で大事だといわれています。子どもに幸せと感じてもらうならば、まず親である私たち自身が努力する、一緒に楽しむということ。最終的に子どもたちの夢の自己実現につながると。私たち大人ができる教育の本質です。」

(講演内容を一部抜粋)